

# The Hope and Failure in Interracial Cooperation: A Study of the Anti-lynching Movement in the 1930s (人種間協力への期待と挫折: 1930年代の反リンチ運動を事例に)

Sachiko Hishida\*

**SUMMARY:** This paper examines African American middle-class women's efforts to establish interracial cooperation with Southern white middle-class women and their failure, focusing on the anti-lynching movement in the 1930s. African American women leaders sought to make an alliance with white women, who had just won suffrage, in order to improve race relations and the conditions for African Americans in the South. Southern white women responded to the call of African American women leaders, organizing the Committee on Women's Work in the Commission on Interracial Cooperation in 1920, and the Association of Southern Women for the Prevention of Lynching (ASWPL) in 1930. At the emotional level white middle-class women accepted African American middle-class women as respectable allies, but in actual fact they did not admit that African Americans had the same political and legal rights as they did. ASWPL's strategy reflected this white women's attitude. They believed that they could abolish lynching through white women's moral influence over their communities. As a result, they did not approve federal intervention via the Costigan-Wagner Bill, the federal anti-lynching bill introduced in 1935, which deeply disappointed African American women. The anti-lynching movement, ASWPL, seemed designed to promote interracial cooperation but instead it revealed the different motives for interracial cooperation between African American women and Southern white women.

---

\* 菱田 幸子 Lecturer, Musashi University, Tokyo, Japan.

## はじめに

1920年代から30年代は、第一次世界大戦と大恐慌の下、南部の白人と黒人との間に新たな緊張関係が生じた時代であった。第一次世界大戦時には、黒人の北部への大移動が労働力流出として南部の白人の不安をかき立て、さらに軍服をまとった黒人兵士に対する敵意も加わって、人種暴動の発生、リンチの増加、KKKの復活など黒人に対する暴力が急増し、南部の社会問題となった。大恐慌時には、社会不安の高まりからいたんは減少傾向にあった黒人に対するリンチ件数が再び増加している。19世紀末から南部社会においては、黒人の選挙権の剥奪、居住・職業・公的施設での人種分離、暴力などさまざまな方法で黒人を抑圧する社会体制が構築されたが、特に当時、黒人に対するリンチは、その残虐非道さが南部の後進性を示すものとして、社会問題視されるようになっていた。<sup>1</sup>

第一次世界大戦に先立つ20年ほどの間、いわゆる革新主義の時代に、中流階級女性たちはそれぞれの立場から地域のセツルメント活動や参政権運動などの社会改革運動に取り組んだ。本論で主に扱う南部における中流階級女性たちの人種間協力の試みも基本的にはこのような革新主義者たちの活動の流れを汲むものとして理解しうる。

このような南部の女性たちの人種間協力の試みとそれぞれの立場の違いが特に明示的な形で現れたのが、南部における黒人へのリンチに反対する運動においてであった。反リンチ運動は、黒人指導者や組織が長年にわたって取り組んできた課題であったが、19世紀末から黒人社会の生活改善や黒人の地位向上のための社会改革運動に携わってきた中流階級の黒人女性たちにとっても、リンチの撲滅は常に目標の一つであり続けた。そのような中で1930年、ジェシー・ダニエル・エイムズ(Jessie Daniel Ames)を中心に南部の中流階級の白人女性たちが反リンチ組織「リンチ防止のための南部女性協会」(Association of Southern Women for the Prevention of Lynching, 以下ASWPLと略記)を結成したことは、反リンチ運動の歴史の中で画期的なことであった。この組織は、南部の白人女性が初めて公式にリンチを「黒人に対する南部に特有の犯罪」として反対する姿勢を示し、リンチを擁護する理論を否定し、南部の世論に影響を与えた点で画期的であり、それまで白人女性の協力を得ようと努力してきた黒人女性活動家たちの期待に応えるものであるように思われた。

しかし、1935年1月11日、ASWPLが、連邦議会に提出された反リンチ法案(Costigan-Wagner Bill)<sup>2</sup>を支持しないことを決定したとき、黒人女性たちの期待は苦い失望に終わった。この組織の指導者たちに対して

黒人女性改革者のルジニア・バーンズ・ホープ (Lugenia Burns Hope) は感情的な言葉で彼女の失望と落胆を表明している。

正直言って、私の心はあまりにも落胆して弱ってしまったので、何か言えるかどうかわかりません。南部の女性たちが示した(連邦の反リンチ法案を支持しないという)態度は、私たちの人種間協力の活動と南部におけるその他のすべての発展を妨げるでしょう。<sup>3</sup>

ホープをはじめとする黒人女性指導者たちは、1920年から、ASWPLの母体でもある人種間協力委員会 (Commission on Interracial Cooperation、以下CICと略記)<sup>4</sup>において、黒人の地位向上のために白人女性との協力関係を築く努力を重ねてきた。それだけに、連邦の反リンチ法案の成立に大きな期待を寄せるホープにとって、この法案に対するASWPLの態度への失望は大きかったに違いない。

本論文においては、1920年代から30年代にかけての南部における白人中流階級女性と黒人中流階級女性の人種間協力の試みとその挫折について論ずることを目的とする。特に、黒人女性指導者たちが当時これほどまでに白人女性との協力に期待をよせたのはなぜか、そして南部の白人女性にとって人種間協力、反リンチ運動とはどのような意味を持っていたのかを考察したい。

## 1. 20世紀初頭の女性改革者たちによる 「リスペクタビリティの政治」

20世紀初頭のいわゆる革新主義の時代に、中流階級の女性たちは、おもに都市部の貧困層の生活改善を目指す社会改革運動に取り組んだ。中流階級の白人女性たちの活動としては、シカゴのハル・ハウスに代表されるような大都市に集住する移民のスラムを改善しようとするセツルメント運動が代表的なものとして想起されるが、南部においても同様に都市人口の急増による貧困や犯罪などの社会問題への取り組みが中流階級の女性たちによってなされた。有賀夏紀は、このような中流階級による革新主義的活動が、社会の改革を標榜しつつも、じつは社会の変化によって自分たちの社会的地位や価値観が脅かされることに危機感を抱いた中流階級が、知性と感受性を兼ね備えた指導的階級としての自らの立場を確認するための活動としての性格をもっていたことを指摘している。<sup>5</sup>

人種隔離が制度化された南部において、白人女性と黒人女性はそれぞれ別のコミュニティで別の組織をつくって社会改革運動に取り組んだ。南部で改革運動を行った白人中流階級女性の関心はおもに白人労働者階級の若者と農村の白人女性たちであり、白人改革者たちが黒人の貧困層に注意を払うことはほとんどなかった。一方、中流階級の黒人女性たちは、白人社会から完全に隔離され行政によるサービスや保護をほとんど得られない黒人居住区において、黒人貧困層の居住環境、教育、福祉の改善に尽力した。しかしながら、これらの活動もまた、基本的には中流階級の女性が果すべき伝統的な社会的役割のイメージにそったものであり、それぞれのコミュニティにおいて女性たちが自らの中流階級としてのステータスを確認するための作業としての性格をもっていた。黒人中流階級女性たちは、おなじ中流階級の白人女性たちにたいして、自らが中流階級としての教養と美德を備えていることを示すことによって、自分たちを認めさせ、連帯を築くことができると考えた。しかしこのような連帯関係は、まさに白人女性の活動が中流階級的価値観にそって行わっていたものであったがために、挫折を迎えることとなったのである。以下に、反リンチ法案をめぐるルジニア・バーンズ・ホープとジェシー・ダニエル・エイムズとの立場の違いに注目しつつ、この問題を分析したい。

ルジニア・バーンズ・ホープは、1908年ジョージア州アトランタで黒人コミュニティのセツルメント組織ネイバーフッド・ユニオン(Neighborhood Union)を設立し、以来黒人の居住環境、教育、福祉の改善に尽力した社会改革者の一人である。<sup>6</sup> 中流階級の黒人女性による地域に根ざした自助組織の活動から、南部における黒人の地位向上を実現するために、さらに前進しようと彼女が選択した道は、白人女性との協力関係を築くことであった。

ネイバーフッド・ユニオンのような中流階級の黒人女性たちによる黒人コミュニティ改善運動は、白人社会に深く浸透していた黒人に対する偏見を覆す試みの一環でもあった。南部社会における人種分離政策、黒人の選挙権の剥奪、黒人に対する法的・社会的差別は、黒人を「生得的に劣った人種」とみるとみなすことによって正当化された。そして、黒人の「劣等性」は当時の白人中流階級的道徳の欠如として表現された。すなわち「自制、勤勉、儉約、洗練された作法、性道徳」は黒人には無縁のものとされ、特に黒人は性的に「放縱で自制できない」というステレオタイプは、南部白人男性による黒人男性に対するリンチと黒人女性に対する性的搾取を正当化する機能を果たした。<sup>7</sup>

黒人に押しつけられたステレオタイプに対する戦いは、黒人女性が長年にわたってとり組んできた問題の一つだった。世紀転換期以降の黒人女性改革者たちは白人社会の価値観を取り込むことによって、これを解決しようと試みた。歴史家のイーヴリン・ブルックス・ヒギンボウザムによれば、世紀転換期の中流階級の黒人女性たちは下層階級の黒人たちに白人主流社会の中流階級的価値観を身につけるよう奨励することで、黒人社会の「自助」を達成するとともに白人社会からの「尊敬」を得ることができると考えていた。かれらは下層階級を中流階級の規範に従わせることで黒人という「人種」全体が生得的に不道徳なわけではなく、教育や自助努力によってリスペクタブルとなりうることを示そうとしたわけである。ヒギンボウザムは世紀転換期の中流階級黒人女性によるこのようなイデオロギーに基づく運動戦略を「リスペクタビリティの政治」(politics of respectability)と呼んだ。しかしこのことは、中流階級の黒人が下層階級の黒人を「生得的に」ではないにしても「不道徳」であるとみなしていたことの表れでもあった。ゆえに、中流階級の黒人たちは、自己を下層階級と差別化することで、黒人を一枚岩的に「劣った人種」であると見る白人社会に対して自分たち中流階級に対する正当な扱いを要求しようとしたことも明らかにされている。<sup>8</sup> 白人中流階級の女性と同様に、黒人社会において家庭とその延長にあるコミュニティをリスペクタブルに維持する役割を負わされた中流階級の黒人女性たちはとくに、下層階級の教化という役割を期待され、実際熱心にそれにより組んだ。ネイバーフッド・ユニオンにおける活動もまさに下層階級の黒人の「道徳的向上」を目指したものであった。

しかし、ネイバーフッド・ユニオンが、自助組織として黒人住民の福祉、教育、医療などさまざまな面で一定の成功をおさめた一方で、ホープは中流階級の黒人女性のみで行う活動、すなわちリスペクタブルな黒人女性による黒人下層階級の道徳的改善によって黒人の権利を認めてもらうという戦略の限界も感じていた。アトランタの黒人住民の福祉や教育の改善のためには、市議会や行政すなわち有力な白人男性を動かす必要があったが、彼女たちの請願活動は実際のところほとんど成功しなかった。<sup>9</sup> また、黒人社会の中では有力な黒人男性も、事実上参政権を剥奪されている状況においてはたいした影響力を持ち得なかった。ホープが黒人の置かれた状況を改善するために協力を期待したのは、白人の中流階級女性たちであった。同じ信仰と道徳を持つはずの中流階級の白人女性たちを仲間に志向することは、自らのリスペクタビリティを白人社会に認知させようとする努力の延長としてごく自然な選択であったであ

ろうし、白人女性を通して白人男性の権力にアクセスすることが期待された。また、女性参政権が成立した1920年以降は、白人女性自身の政治力にも当然大きな期待が寄せられたはずである。

第一次世界大戦後の人種間の緊張を緩和するために白人の側でも「黒人問題」を改善しようという機運が生まれていたこともあり、この連帶は実現するかに見えた。南部社会において、白人男性の権威を象徴する所有物としてリスペクタビリティをいやおうなく付与されていた白人女性と、白人社会からリスペクタブルではありえないというステレオタイプを押し付けられ、自らの市民としての権利を主張するためにリスペクタビリティを証明しようとしていた黒人女性は、どちらも自らのリスペクタビリティを武器に「人種間協力」に取り組んだのである。しかし、その動機と目的が異なっていたために、結局白人女性は黒人女性の期待に応えることができなかった。

20世紀転換期の黒人女性の「リスペクタビリティの政治」について詳細な研究をしたヒギンボウザムとグレンダ・ギルモアは、どちらも1920年の女性参政権の獲得までを区切りとしている。ギルモアは、南部において黒人女性のこの戦略が、白人女性との小規模で散発的な「人種間協力」を生み出し20年代のより組織的な協力への足がかりとなったことを論じているが、本論文では、20年代に実現した「人種間協力」は、1つの達成であったと同時に、世紀転換期のリスペクタビリティの政治の限界を露呈するものでもあったことを示したい。<sup>10</sup>

## 2. 人種間協力に向けて—CIC 女性活動委員会の成立

ホープは、白人女性との協力を目指す最初の試みとして、キリスト教女子青年会 (Young Women's Christian Association) の黒人アトランタ支部設立をめざし、この組織内の人種差別的政策に対して抗議活動を展開した。<sup>11</sup> 結局ホープがかかわった20世紀初頭において、黒人女性に対する不平等な政策はなくならなかつたが、ホープは、この活動を通して、他の地域の黒人女性指導者たちと、白人女性との協力体制を築く必要があるという認識を共有するに至った。1920年にホープの呼びかけに応えて集まつた黒人女性指導者たちは、「キリスト教精神を持ち、バランスの取れた判断ができ、勇気のある優秀な白人と黒人の女性たち」がともに活動するべきだという考えを確認しあつた。<sup>12</sup>

同年、白人メソディスト派の全国組織であるメソディスト女性伝道会

議（Methodist Woman's Missionary Council）は、年次会議において、南部の白人女性たちが人種間協力の運動に積極的に参加することを目標の1つに掲げた。<sup>13</sup> この両者を引き合わせたのがCICのウィル・アレグザンダー（Will Alexander）で、これがきっかけでCIC内部に「女性活動委員会」（Committee on Women's Work）が結成されることになる。その経緯は以下の通りであった。ホープは、メソディスト女性伝道会議の人種関係委員会を立ち上げた2人の白人女性をタスキーギ大学で開かれた全国黒人女性協会（National Association of Colored Women）<sup>14</sup> の集会に招待した。ここで、全国的な知名度を持つ黒人女性指導者たちとの会合を持った白人の2人は、「黒人女性たちの知性と真剣さ」に衝撃を受け、黒人の中流階級が存在することすら知らなかったことを告白した。「私は、すばらしい教育機関を卒業した…教育、教養、洗練を備えた黒人女性たちに会いました。私は今までずっと南部に住んできましたが、彼らのような人々がこの土地に住んでいるとは知りませんでした。」<sup>15</sup>

タスキーギを訪れた白人女性たちの求めによってCIC女性活動委員会（Committee on Women's Work）が設立され、そのうちの一人であったキャリー・パークス・ジョンソン（Carrie Parks Johnson）がその長に就任した。1920年10月、テネシー州メンフィスで南部女性の会議が開かれ、プロテstantの各宗派、女性クラブ、YWCAを代表する91名の白人女性が集った。ここにマーガレット・マリー・ワシントン（Margaret Murray Washington）、シャーロット・ホーキンズ・ブラウン（Charlotte Hawkins Brown）など4人の黒人女性指導者が招かれて講演をした。なかでもブラウンの講演は、白人女性に衝撃と感動を与えたという。ブラウンは、メンフィスへ来る途中の列車で一等車から引きずり出されるという屈辱を受けた経験を語り、すべての黒人女性は不道徳であるために性的搾取から守られる資格がないという偏見が黒人女性に対する不当な扱いを生んでいることを訴え、白人女性の純潔を守るためにという口実で正当化されているリンチを防止するために行動を起こすよう促した。最後にブラウンは白人女性たちに対して、「あなた方が私を足で踏みつけにしている限り神はあなたの手をとりはしないでしょう」と結んだ。聴衆のほとんどは非常に心を動かされ、ブラウンの演説に応えて立ち上がりキリスト教の友愛と連帯についての賛美歌を歌ったという。<sup>16</sup>

タスキーギとメンフィスでの白人女性と黒人女性の会合はどちらも非常に感情的な盛り上がりを見せた。白人女性にとっては、それまで存在することすら知らなかったリスペクタブルな黒人女性の存在を認め、その訴えを同胞として聞くというまさにそのことが大きな前進であった。

当時南部においては、白人女性の集会に黒人女性が招かれて講演するというだけでも世論の批判を浴びる可能性のある、いわばスキャンダラスなことであったが、それが実現したというだけでも評価に値する。黒人女性にとっては、十把一からげに「劣った人種」として扱われるのではなく、リスペクタブルな中流階級の女性として白人女性から同胞として認知されたということは、やはり1つの達成であった。白人と黒人の個々人の間の友情に基づくものではなく、南部の白人女性と黒人女性の組織の代表の間にこの関係が、象徴的なレベルではあっても公的な出来事として築かれたことに意味があった。

### 3. 女性活動委員会の活動方針をめぐる対立

メンフィスでの会合の盛り上がりに促されて、CICの州および地方支部にも女性活動委員会が組織された。しかし、人種関係および黒人を取り巻く不公平な状況を改善するための具体的な活動方針を決める段階になると、たちまち白人女性と黒人女性の間で意見の食い違いが現れた。このことは、「人種間協力」という言葉の持つ意味がCICの白人と黒人の間でずれていたことを示す。白人女性と黒人女性の「人種間協力」に対する認識のずれは、CIC女性活動委員会の立ち上げ時からさまざまな場面で両者の摩擦を生んだが、特に両者の関心と姿勢が如実に現れたのが、参政権とリンチに対する態度である。以下、両者の発言を見ながら、黒人女性と白人女性がどのように「人種間協力」にかかわり、どのような関係を築いたのかみていきたい。

タスキーギの会合の後に、ジョンソンの求めに応じて、ホープら黒人女性たちは女性活動委員会が取り組むべき課題についてまとめた文書を書いていた。その項目は、家事使用人の労働条件の改善、児童福祉の拡充、公共交通機関における差別的扱いの禁止、教育機関の充実、リンチ反対、白人メディアにおける黒人の描写の改善、黒人の参政権の要求と、7項目にわたっていた。ところがジョンソンは、それを書き手に知らせるこことなく書き直して、CIC女性活動委員会の今後の活動の指針としてメンフィスの会合で発表し、黒人女性たちを驚かせた。問題になった書き換えは、以下の3点であった。まずジョンソンは、黒人女性が「アメリカの女性に認められているすべての特権と権利を享受することを希望する」という部分が問題であるとして、前文をすべて削ってしまった。<sup>17</sup>また、「いかなる行為に対するリンチも非難する」という一文は、「黒人男

性の側が取る暴徒の心理をかきたてるようないかなる行為も非難する。いかなる女性に対して暴行を加えたいかなる男性も法律の範囲内で迅速に罰されるべきである」とされた。黒人の参政権の要求はすべて削除された。<sup>18</sup>このように、CICの白人女性たちは、中流階級の黒人女性たちに対して感情的には共感を示したが、社会的・法的に対等な存在とは認めていなかった。白人女性たちの姿勢は、自分たちの黒人女性に対する「理解」と「善意」によって黒人問題を解決するのだというパターナリストイックなものであったといえる。

白人女性たちのこのような一方的な姿勢は、この文書の出版をめぐる黒人女性たちとのやり取りの中にも現れた。ジョンソンは、上述のように書き換えたものをCICの黒人女性と白人女性の共同声明文として印刷して配布することを計画した。ホープはこれに反対し、オリジナルの文書を使うよう要請したが、白人側は応じなかった。おもにジョンソンとホープの間で、半年にわたって議論が続き、妥協案が出たが、結局ジョンソンは白人女性委員全員の賛同が得られなかつたことを理由に共同声明の配布を一方的に取りやめることを宣言し、代わりに白人女性のみの全会一致で採択された「南部女性と人種協力」と題するパンフレットを配布した。<sup>19</sup>

一方、黒人女性たちは、CICで廃案となった声明文の妥協案が葬り去られるままにはしておかなかつた。彼女たちは、これを黒人女性クラブの連合組織である「黒人女性クラブ南東部連合」(Southeastern Federation of Colored Women's Clubs)の綱領として採用し、「南部黒人女性と人種協力」というタイトルでパンフレットにした。<sup>20</sup>発行は南東部連合であるが、そのタイトルおよび形と体裁はCIC発行の「南部女性と人種協力」とそっくりである。「南部の黒人女性たちの心情を表した」版をあえてCICの白人版と相似形にすることで、黒人女性側の主張が白人女性の示すものとは異なることを示す対抗策であった。<sup>21</sup>しかし、内容には黒人女性側の妥協のあとがうかがえる。前文は削除され、参政権の要求もオリジナルの明快な主張は冗長な表現に改められ、リンチに関しては、ジョンソンが「黒人男性の側の」とした部分を「いかなる男性の側の」と言い換えるにとどまった。黒人女性は、女性の権利としての参政権の要求はあきらめても黒人の参政権に関しては譲らなかつた。また、リンチの原因が女性に対する性的な暴力にあるという点は譲つても、黒人男性を一方的にレイピストとして描く表現は許容しなかつた。このように「南部黒人女性と人種協力」は、黒人女性の妥協点と譲れない点を浮き彫りにした。

#### 4. 反リンチ運動とASWPLの限界

CICにおいて、黒人女性は、白人女性側の一方的で不当な扱いには抗議をしたが、決して連帯をあきらめることはなかった。保守的な南部の白人女性の協力を最も効果的な形で得られるよう、時には妥協しながら交渉したのである。しかし、CIC女性活動委員会の実際の活動の基盤となる州や地方支部の組織化は遅々として進まず、組織は20年代半ばにはほとんど具体的な結果を出せないまま停滞状態におちいってしまった。<sup>22</sup> CICの女性活動委員会が再び活気付いたのは、1928年にジェシー・ダニエル・エイムズが指導的地位についてからである。テキサス州出身のエイムズは、同州で女性参政権運動に従事した後、1924年からCICテキサス支部の長を務め、その実績が評価されて1928年アトランタのCIC本部で女性活動委員会の長に就任した。<sup>23</sup>

CIC在任中、エイムズが最も力を注いだのは反リンチ運動であった。CIC女性活動委員会の長としてジョンソンから引き継いだ黒人コミュニティの福祉の向上や教育設備の改善などの仕事に取り組む一方で、1930年11月に新たにASWPLを立ち上げその長にも就任した。ASWPLは、大恐慌による社会不安からリンチ件数が急増したことを見て、エイムズの呼びかけに応じて集まった26人の白人女性によって設立された。CICの資金提供によって運営されながら、ASWPLのメンバーは白人女性だけに限定されていた。CICは設立当初から反リンチ運動を展開していたが、ここに来てなぜ反リンチ運動のための新しい組織を、女性のみでしかも白人限定で作る必要があったのか。

これにはまず、エイムズが一貫して関心を持ってきた女性の地位の問題が絡んでいる。1929年9月の会議において、エイムズは、州の委員会を性別に基づいて区分することをやめることを提案している。それは、男性の委員会に従属する委員会としての「女性部門」「女性副委員会」という名称をやめて、代わりに「一般教化委員会」を立ち上げようという案であった。<sup>24</sup> このように女性の自立した組織のあり方を追求していたエイムズに、反リンチ運動は絶好の機会を提供した。ASWPL設立以前にCICでは南部リンチ調査委員会が設立されていたが、そこには女性が一人も含まれていなかった。男性エリートの既存の委員会に女性を送り込むよりは、リンチを南部の女性の問題として取り組む独自の組織を作ることを選んだエイムズは、アレグザンダーを説得してCICの資金提供を受け、CIC女性委員会の地方での活動を支える教会のネットワークを利用しながらも、男性が運営するCIC地方支部に従属しない女性だけの独立した

組織としてASWPLを立ち上げたのである。

会員を白人女性に限定したのは、1つには、後述するようにリンチの問題を白人女性の問題として捉えることによって、南部白人社会の世論に白人女性による働きかけをすることが有効であると考えたからである。もう1つの理由は、これまで人種問題にかかわったことのない一般の白人女性を巻き込むためであった。当時の南部白人の「社会的平等」に対する恐怖感は非常に根強いものだったので、人種混合の組織にあえて身を投じる人はきわめて限られた存在だった。リンチを南部白人女性の問題と捉え会員を中流階級の白人女性に限定することで、南部の中流階級の白人女性のより幅広い層を取り込もうとしたのである。

ASWPLによる南部白人女性たちの動員は、おもに以下のように展開された。前述したように、ASWPLは南部の教会組織を中心とする女性団体の協賛をえて、それらの団体の代表者で構成される州・地方の支部を作っていた。ASWPLに対する南部の地方の白人女性たちの賛同を得るために、彼女たちに対する啓蒙活動が必須であった。そのためには、ASWPLの指導者を地域の教会や学校などに派遣して行う講演や討論といった直接的な働きかけと、パンフレットなど文書の配布によってリンチの情報とASWPLの理念を伝えるという二つの方法がとられた。<sup>25</sup>こうして得られた賛同者に対しては、ASWPLの反リンチの決議が提示され署名が集められた。決議文は、コミュニティの道徳に責任を持つ母親としての女性の役割を自覚させるものであった。

私たちは、リンチという犯罪の脅威に対して、世論を喚起することを誓います。そのような無法な行為の結果について理解するよう私たち自身のコミュニティの若者を教育することによって、また、法と文明と宗教の教えに対するそのような冒涜に反対する活動に参加するよう、新聞、聖職者、学校、すべての愛国的市民に呼びかけることによって。<sup>26</sup>

署名は、リンチが起りそうになったときその地域の賛同者にすぐ行動を起こすよう呼びかけるために、カード目録に整理された。<sup>27</sup>ホールによると、毎年およそ6,000人の女性が署名し、1936年までに29,269人の署名が集まっている。<sup>28</sup>このようにして、ASWPLは、地方の白人女性たちの草の根のネットワークを作り出していった。

ASWPLの最も際立った特徴は、リンチを正当化する際に必ず使われる議論、すなわち南部白人女性を黒人男性によるレイプから守るためにリ

ンチは必要だという主張を明確に否定したことであった。ASWPL設立に先立ってエイムズが主催した会議の決議文は、「女性の保護のために必要であるという口実によってそのような犯罪(リンチ)が許されているという状況にかんがみ、われわれ白人女性は、リンチに対するそのような弁護を公的に否定し非難したい」と冒頭で宣言している。<sup>29</sup>エイムズのリンチ批判の中核となるこの姿勢は、CIC設立当初に示された白人女性によるリンチ観を覆すものであった。反駁にはCICの調査による具体的な統計の数字が使われた。たとえば、1931年のノース・カロライナ支部の会議では、過去8年のリンチの統計資料が配布された。その間に全国211件中南部で204件のリンチが起こっていること、その204件のうち、原因がレイプまたはレイプ未遂とされるものは3割しかないこと、1割は原因の特定すらできないことが強調された。<sup>30</sup>

この事実自体は決して新しい発見ではなく、30年前から黒人女性が繰り返し主張してきたことであった。そして、プラウンがメンフィスの会議ですでに主張していたように、黒人女性たちは、南部白人女性たちがこのリンチ正当化のためのイデオロギーに反対することの意義と効力を十分認識していた。白人男性が守るといっているまさにその当人の白人女性がそのうそを暴くことは、南部白人社会に最も訴える力を持つと考えられたからである。ASWPLにおいて、南部のリスペクタブルな白人女性が声を合わせてこのイデオロギーに反対したことは画期的なことであり、黒人女性たちの期待に応えることでもあった。

ここまで見てきたように、ASWPLによるリンチ問題への取組みは、南部白人女性に対する教育によってその目標が達成されるとしていた点に大きな特徴がある。黒人の問題は白人女性への教育を通して解決されうるという姿勢は、エイムズの活動に一貫するものであった。そのことはCICの活動においてエイムズが執筆したパンフレット類によく表れている。エイムズは、CIC地方支部の女性たちに黒人問題の解決のため具体的にどのようなことをすべきか教えるためのガイドを著し、パンフレットにして配布した。たとえば『家事使用人の値段はいくら』と題されたパンフレットは、黒人女性の家事使用人を雇っている南部白人女性が友人の白人女性に語りかけるという設定で書かれている。それによると、彼女が息子の子守として雇っている黒人女性ロージーは、父親のわからない子どもを出産したが、仕事をしている間赤ん坊の面倒を見る人がいないため、心配で仕事に身が入らず、態度も悪くなつた。しかし、10歳のときからロージーを雇い、「座って食事をすることさえ知らなかつた」彼女に作法を教え、「よいクリスチャンの手本を示してきた」雇い主とし

では、いまさら息子がよくなついているロージーを手放す気にはなれない。そこで、赤ん坊を抱えた雇い人を持つ白人女性たちが集まって、赤ん坊たちの面倒を見る黒人を共同で雇い、雇い人が安心して働くようすることを思いついたという。<sup>31</sup>

ここには「黒人問題」を改善しようと身構えなくても、身近な家庭の日常の中から自分にできることを見つけて行動していくべきよい、という考え方があががえる。自分にとって一番身近な家事使用人の状況を知り労働条件を改善することで、「自分自身も彼らも助ける」ことができるというわけである。しかしここには下層の黒人に対する偏見が露骨に示されており、黒人女性を問題の当事者として見る視点はない。そして、エイムズは、そのような黒人の「問題」は、白人女性が道徳的な、あるいは家政上の動機に基づいて黒人に対する扱いを改めることによって解決されると考えていたのである。

リンチを防止するという点においても、エイムズが意図したのは、白人女性たちの地域社会の道徳的秩序に対する影響力を高めることであった。前述のように、リンチ反対運動においてまずASWPLが最も力を注いだのは、南部の地方の白人女性を教化してリンチ反対の決議文に署名させることであった。そして、それらの女性たちが地域の警察や役人に圧力をかけることによって、あるいは直接リンチを起こす側の男性を引き止める力になることによって、リンチの抑止効果を狙った。黒人に政治的、法的権利を与えることによってではなく、白人の側の見識を改めることによって問題の解決を図ることが主眼であり、それは家庭とコミュニティの道徳の守り手としての女性の役割だったのである。

また、リンチ問題は、南部の白人女性が「女性の問題」として取り組むことのできるテーマでもあった。人種分離と差別によって黒人を搾取するシステムの上に南部の経済が構築され、女性を男性の所有物とみなす家父長的な社会基盤が維持されてきた南部において、白人男性にとっての社会的な脅威は常に黒人男性と白人女性の性的な関係として投影されてきた。黒人男性の政治的権利を認めることは、黒人男性に白人女性を手に入れる力を与えることと解釈され、黒人参政権イコール異人種混交として語られた。人種分離の解消についても同様である。いずれにしても、「神聖な」白人女性のイメージは白人男性の所有物としての白人女性の価値を表すものであるから、リンチを正当化するイデオロギーに反対することは、白人女性たちにとって、女性を抑圧する南部の社会システムを批判することになったのである。

南部白人女性たちは、自分たちのリスペクタビリティを武器にしてそ

れを作り出している南部の社会基盤となるイデオロギーを批判した。それは、18世紀末から19世紀初頭のイギリス道徳革命の時代から、白人女性たちが繰り返し採用してきた戦略であった。それは、たとえば虐げられているものへの憐憫を示すことや、野蛮なものを拒否することによって自分たちの趣味の洗練を示すような種類の運動としてあらわれた。リンチは、彼女たち自身の問題を含んでいただけでなく、中流階級のリスペクタビリティの範囲を超えることなく取り組むことのできる社会問題でもあった。つまり、ASWPLの反リンチ運動は黒人の社会的地位の向上や政治的権力の獲得を目指すラディカルな運動ではなく、白人女性の伝統的なリスペクタビリティに基づく運動であり、むしろ彼女たちの地域における発言力の向上と、家父長的社會からの開放のための運動により近いものであったと考えることができる。南部白人社会における反リンチ感情を高めるという使命は、未来の政府を担うコミュニティの子供たちの母、教師としての役割として描かれた。家庭の延長としてのコミュニティにおいて、道徳の導き手としての母親あるいは教師の役割を果たすという構図にすることで、伝統的な女性イメージを利用した運動となつたのであった。<sup>32</sup>

しかし、社会から容認されるイメージを利用して当の社会を批判するというやり方は、その社会の中での発言力を増すことにはなっても、社会基盤そのものをこわすことにはつながらない。ASWPLによって、リンチは、彼女たちの道徳的影響力によって白人の人々の認識を改めることによって解決することのできる白人コミュニティの問題として読みかえられていった。リンチは、現実には黒人を抑圧しコントロールするための手段として行っていたのであるが、ASWPLの文書においては、まったくその点に対する言及がない。ASWPLジョージア州支部の決議文は、ASWPLの姿勢を端的に表している。

リンチの眞の被害者は、殺された者ではなく、正当な手続きを持って正式に設立された政府であると、私たちは断言する。…リンチという犯罪を引き起こす暴徒は他のいかなる犯罪よりも私たちの家庭、私たちの子どもたち、私たちの国を脅かすものであると、私たちは理解している。<sup>33</sup>

極端な言い方をすれば、ここにはリンチの被害者が黒人であるという視点が存在しない。リンチの被害者は、それが起こった（白人）社会とそこに住む子どもと女性である、そして将来その子どもが担うことにな

る政府であるというのがASWPLの基本姿勢であった。つまり、リンチは白人社会の道徳的秩序を乱すから問題なのであって、黒人が殺されているから問題なのではないのである。

それが、ASWPLの限界でもあった。冒頭で述べたように、反リンチ法を成立させることによって連邦の介入という形でリンチの発生を抑えることにどうしても賛成できなかったのは、ASWPLの存立基盤そのものがそもそも南部社会の規範の中にあったからであった。この法案は、連邦がリンチの起こったコミュニティとコミュニティの治安を維持すべき責任者を罰するものであった。ASWPLは、リンチの起こったコミュニティこそリンチの被害者であると捉え、白人女性の道徳的・政治的影響力でそのコミュニティとコミュニティの選任する責任者を教化することにより、リンチを防ぎ、結果としてコミュニティを救うことを目的としていた。ゆえに、コミュニティにおける制度の改革によってリンチ問題を解決するというやり方は、むしろ彼女たちの理念に反することだったのである。

### おわりに

ルジニア・バーンズ・ホープにとって、CIC女性活動委員会誕生時に盛り上がった白人女性との「人種間協力」への期待は、ASWPLの連邦反リンチ法不支持という苦い失望に終わった。

南部の白人至上主義と厳しい人種隔離体制の下で、1920年にCIC女性活動委員会が、1930年にASWPLが設立されたことは、南部の中流階級の白人女性たちの組織的活動としては非常にまれな画期的な出来事であり、中流階級の黒人女性は白人女性との組織的な「人種間協力」実現への期待を高めた。CIC女性活動委員会の中核を担ったのは、革新主義時代の社会改革運動に携わった経験を持つ女性たちであった。中流階級の黒人女性は、第一次世界大戦までにリスペクタビリティの政治の限界を自覚し、それを超える方策として、同じ価値観を持つはずの中流階級の白人女性との同盟に期待し、1920年に与えられた参政権に基づく白人女性の政治力にも期待を寄せた。また、第一次世界大戦と大恐慌による南部の「人種関係の悪化」によって「黒人問題」への関心を強めた白人女性たちは、そのような黒人女性たちとの「人種間協力」への意欲を示した。しかし、南部の白人女性にとって、「黒人問題」への取り組みは、自分たちの女性としての道徳的な威信を示して、地域社会における発言力

や影響力を高めるという側面を色濃く持っていた。したがって、そのような目的を逸脱して、南部の社会基盤となっている制度や法律を改変する可能性のある方向に踏み出すことはなかった。CIC女性協力委員会の誕生は、黒人女性と白人女性の協力的な活動の端緒を示すよう見えたが、その歩みよりはもともと双方のコミュニティ内部における女性たちの中流階級的リスペクタビリティという観念に基づいたものであつたために、かえってお互いの立場の違いをより鮮明に浮き上がらせるものとなつたのである。

### Notes

- 1 メディアや交通機関の発達、消費文化の興隆に伴って、大規模な見世物の様相を呈するリンチの形態が現れたことをグレイス・エリザベス・ヘイルは指摘している。広い地域から集まつた大勢の見物人を前に、被害者は拷問の末殺害され、その死体の各部は記念品として持ち去られたり売られたりした。多くの南部人がこのようなリンチに参加、賛同した一方で、その残虐非道さが南部の後進性の証として批判されるにいたり、南部においても知識人を中心とする一部の白人は公にリンチに反対する姿勢を示すことになった。Grace Elizabeth Hale, *Making Whiteness: the Culture of Segregation in the South, 1890-1940* (New York: Vintage, 1998), 199-239.
- 2 1933年、ニューヨーク州上院議員ロバート・ワグナー (Robert F. Wagner) とコロラド州上院議員エドワード・コスティガン (Edward P. Costigan) が共同提案した法案。リンチを起こした暴徒自身を連邦が取り締まるものではなく、地方あるいは州の役人がリンチを防ぐ努力を怠つたり暴徒と共謀したりした場合の罰則を定め、リンチの起つた郡に罰金を課すものであった。連邦下院議院を通過したが、上院においては南部議員のフィリバスターにより成立しなかった。
- 3 Jacqueline Anne Rouse, *Lugenia Burns Hope: Black Southern Reformer* (Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 1989), 117; Gerda Lerner ed., *Black Women in White America: A Documentary History* (New York: Vintage, 1972), 475.
- 4 第一次世界大戦後の人種間の緊張を緩和しようと、1919年、元メソディスト派の牧師ウィル・アレグザンダーの主導でアトランタの白人知識人たちが「人種間の関係改善」を目的としてCICを設立し、翌年から黒人指導者も参加した。運営費のほとんどは北部の基金、慈善家から出ていた。アトランタに本部、南部13州に支部がおかれて、1920年代には地方支部が800ほど作られた。Morton Sosna, *In Search of the Silent South* (New York: Columbia University Press, 1977), 20-24; John Egerton, *Speak Now against the Day: The Generation before the Civil Rights Movement in the South* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1994), 47-50; Cynthia Neverdon-Morton, *Afro-American Women of the South and the Advancement of the Race, 1895-1925* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1989), 226-28; Jacquelyn Dowd Hall, *Revolt Against Chivalry: Jessie Daniel Ames and the Women's Campaign Against Lynching* (New York: Columbia University Press, 1979), 60-65.

- 5 有賀夏紀『アメリカの20世紀（上）1890年－1945年』（中央公論新社、2002年）、79-82頁。
- 6 ネイバーフッド・ユニオンについては、以下を参照。Neverdon-Morton, 57-90; Rouse, 57-90; 拙稿「黒人女性改革者の活動に見られる中産階級的価値観—アトランタのネイバーフッド・ユニオンを事例に」『史境』37号（1998）。
- 7 Deborah Gray White, *Ar'n't I a Woman?: Female Slaves in the Plantation South*, 2<sup>nd</sup> ed. (New York: W. W. Norton and Company, 1999), 27-61; Leon F. Litwack, *Trouble in Mind: Black Southerners in the Age of Jim Crow* (New York: Vintage, 1998), 302-06.
- 8 Evelyn Brooks Higginbotham, *Righteous Discontent: The Women's Movement in the Black Baptist Church, 1880-1920* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1993), 14-15, 185-229; Kevin K. Gains, *Uplifting the Race: Black Leadership, Politics, and Culture in the Twentieth Century* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996), 1-17.
- 9 前掲拙稿、60。
- 10 Glenda Elizabeth Gilmore, *Gender and Jim Crow: Women and the Politics of White Supremacy in North Carolina, 1896-1920* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996), xvii, 199-202.
- 11 各地方の黒人YWCA組織はその地域の白人支部の承認を得た上で白人の地方支部の下位組織として活動しなければならない規則だったため、アトランタ支部の設立はなかなか実現しなかった。YWCAとホープのかかわりについては、以下を参照。The Neighborhood Union Collection. Atlanta University Center, Robert W. Woodruff Library, Atlanta, Georgia（以下NUCと略記），box 13, folder 1-41; Rouse, 91-106; Neverdon-Morton, 207-18.
- 12 Mary J. McCrorey to Lugenia Hope, 6 July 1931, NUC, box 10, folder 65.
- 13 Carrie Parks Johnson, "Report: Commission on Race Relationship," 1921, NUC, box 12, folder 2; メソディスト女性伝道会議のセツルメントには、黒人を対象としたものが含まれていた。1913年に設立されたナッシュビルのペツレヘム・ハウスは、両人種により運営された黒人対象のセツルメントとして成功したまれな例であるが、その初代管理者であったエスティル・ハスキンズ（Estelle Haskins）は、タスキーギに招かれた二人の白人女性のうちの一人であった。
- 14 1896年にワシントンで黒人女性のクラブが連合して設立された、最初の黒人女性の全国組織。黒人社会の自助と生活環境の改善を主張し、セツルメント活動や福祉施設、公衆衛生のための運動を行った。また、女性参政権運動を支持し人種分離政策やリンチに反対した。第一次世界大戦までにその会員数は、30万人に達していた。
- 15 Johnson, "Report," 1921, NUC, box 12, folder 2.; Hall, 88; Neverdon-Morton, 228.
- 16 Hall, 90-95.
- 17 Lugenia Hope to Mrs. Archibald Davis, NUC, box 10, folder 37.
- 18 NUC, box 11, folder 4, 5, 6, 7.
- 19 Carrie Parks Johnson to Lugenia Hope, 13 February, 12 March, 11 May 1921, NUC, box 10, folder 37, 38, 39; Lugenia Hope to Mrs. Archibald Davis, 1 March 1921, NUC, box 10, folder 37, 38; Lugenia Hope to Carrie Parks Johnson, 11 May 1921, NUC, box 10, folder 39; *Southern Women*

## The Hope and Failure in Interracial Cooperation

- and Race Cooperation* (Commission on Interracial Cooperation, n.d.), NUC, box 10, folder 31.
- 20 *Southern Negro Women and Race Cooperation* (Southeastern Federation of Negro Women's Clubs, n.d.), NUC, box 10, folder 31.
- 21 Marion Raven Wilkinson to Lugenia Hope, 28 May 1921, NUC, box 10, folder 39.
- 22 声明文をめぐる議論が終結した後、NUCに残っているCIC関係の書簡数は一気に減り、エイムズが委員会の長に就任するまで少ない状態が続いた。box 10, folder 53-70; ジョンソンは、1924年の報告の中で、「州の委員会はひとつとして満足に組織されていない」し「明確な具体的活動」も「明確な結果」も出でていないことを認めていた。Report of Informal Conference of State Leaders, Atlanta, Georgia, 18-19-20 February, 1924, NUC, box 12, folder 6.
- 23 エイムズについては、Hallを参照。
- 24 Minutes of Membership Committee, 21 September 1929, NUC, box 10, folder 53.
- 25 "Lynchers in Congress," *Charlottesville Reflector*, no. 47, 30 July 1934, in University of Virginia, "Race and Place: African American Community Histories," <<http://www.vcdh.virginia.edu/afam/reflector/6.30.34.law.html>> (21 September 2005); Hall, 210-17.
- 26 Resolutions, n.d., NUC, box 11, folder 20.
- 27 署名者のリストは、ASWPL本部の連絡名簿にも加えられ、リンチの正当化の理論を覆す事例や統計資料、リンチが起こりそうになったときの対処法などについて書かれたさまざまな文書の配布先ともなった。Hall, 172-73.
- 28 Hall, 179-80.
- 29 *Association of Southern Women for the Prevention of Lynching: Beginning of the Movement*, (Commission on Interracial Cooperation, 1932), NUC, box 11, folder 14.
- 30 Program of the Conference of the State Committee of Women for the Prevention of Lynching, 1931 in Jewish Women's Archive, "JWA—Gertrude Weil—'Interracial Cooperation,'" <<http://www.jwa.org/exhibits/wov/weil/interracial.html>> (15 September 2005); Report of the Association of Southern Women for the Prevention of Lynching, 1932, NUC, box 12, folder 15.
- 31 Jessie Daniel Ames, *What Price Domestic Service?* (Commission on Interracial Cooperation, n.d.), NUC, box 10, folder 24.
- 32 Resolutions: Adopted by Georgia Association of Women for Prevention of Lynching, 14 January 1931, NUC, box 12, folder 14; Report of Association of Southern Women for the Prevention of Lynching, 1 January-1 July 1932, NUC, box 12, folder 15.
- 33 Resolutions, 1931, NUC, box 12, folder 14.